

GCOE・SRC 特別セミナー“Negotiating Goods and Languages on Cross-Border Open-Air Markets
Throughout the Post-Socialist Space”に参加して

西原周子（北海道大学大学院文学研究科 M2）

2011 年 3 月 10 日（木）、スラブ研究センターにて Dieter Stern 教授（ゲント大学）による上記の講演会が行われた。Stern 教授は東スラヴ諸語の文献学的研究の専門家として知られているが、近年は、スラヴ語研究においてこれまで注目されてこなかったロシア語をベースとしたピジン言語研究で大きな成果を上げている。今回の講演は、現在教授が進めているロシア語と中国語の言語接触研究を、言語と境界の相互関係という視点から論じるものであった。

具体的な題材として、Stern 教授は共産主義体制崩壊後に活発化した青空市場、特に極東ロシアと中国の国境地域における小売市場を取り上げ、そこで観察される言語使用の社会的背景とその言語特徴の分析を行った。そしてロシア人消費者と中国人商人との間に見られる言語の選択および具体的な言葉の使い方から、言語の社会的な役割を明らかにし、新たなピジン言語が形成される可能性が検討された。

Stern 教授は、東欧やロシア各地における青空市場に見られる重要な特徴、例えば、国境地域や大都市のように交通が盛んで、法的には空き地とされている無人地帯に開かれていること、あるいは、徐々に衰退して消えるのではなく、その土地が再び正規に使用されるようになったことによって突然消滅することが解説した上で、ロシアと中国の国境地域、特にザバイカリスク＝満州里間に存在する青空市場がケーススタディとして取り上げた。

ロシア＝中国国境地域のコミュニケーションにおいて、中国語、ロシア語、また両語の混合言語を使用するという三つの選択肢があるが、Stern 教授の観察によると、多くの場合はロシア語が用いられ、中国語は常套句としていくらか差し挟まれる程度だそう。これは、中国人が売り手、ロシア人が買い手という立場である場合、売り手がロシア語を選択することは自然に思える。しかし卸売業者やシャトル貿易業者の場合には、その言語選択は一見不可思議である。ロシア人側はソ連における優位性という歴史的な自己イメージのために他者の文化水準を受け入れることに慣れておらず、同時に中国人側がヨーロッパ性を喜んで受け入れる傾向にあることが大きく関わっているという。

また、ロシア人と中国人の双方が共通して持つステレオタイプによれば、中国人のほうが勤勉であり、ロシア人が中国語を学ぶよりも中国人がロシア語を学ぶほうが理にかなっているとも考えられていることも指摘していた。

ところで、興味深いことに「誰がどの言語を用いるか」という問題は、Stern 教授の講演の一週間前に行われた Jiří Nekvapil 教授（カレル大学）の講演“Old Borders in New Context: On

the Language Situation in Multinational Companies Operating in Central Europe”でも扱われている。Nekvapil 教授によると、チェコ国内のドイツ系多国籍企業の支社では、チェコ人雇用者がチェコ語を、国外から赴任してきている社員の大多数には理解できない内輪の会話に用い、彼らの社会的ネットワークを保っているという。同様にこれらの中国人が、中国語をロシア人には理解できない内密の会話のために使用していることも考えられるが、Stern 教授はこの点については論じていなかった。言語の使用者の関係、話題の領域、言語使用範囲は、言語接触を考える上でそれぞれ重要な側面であるため、これらの詳細な研究も Stern 教授の研究課題の一つになるだろう。なお、Stern 教授は、中国人がロシア語の単語を漢字で表記し、中国語訳をつけたもののリストを作成し、相互に交換しているということが講演の中で紹介していたが、この単語リストを使うのは中国人だけで、ロシア人は使用しないという。こういった現象に関しては、前述のような売り手と買い手の立場の違いや、ロシア人と中国人それぞれの文化に対する態度で説明がつくことのように思われた。

続いて、Stern 教授は、ロシア人と中国人のコミュニケーションにおいて初期ピジン的な特徴が存在することから、そこでピジン言語が生まれ得るかという問題を論じた。この国境地域のコミュニケーションでは、中国語起源の単語や、ロシア人の想像する中国語的な発音をロシア語に適応したものが観察され、またいくつかの語彙（例えば、男性への敬称として用いられる“kapetan”など）は、18 世紀初頭から 19 世紀半ばまで用いられていた以前のロシア語と中国語のピジンの名残ではないかとも考えられるという。

Stern 教授によると、現在のロシア・中国の交易業者や工場労働者たちの使用する言語は、ピジンの定義を満たすには充分ではなく、ピジン化が国境地域に広がる兆候もないという。彼らの交易の言語には共通の構造を持つに至るほどのネットワークが欠けており、またそこに見られる言語的特徴（例えば、動詞命令形の一般化、格変化の放棄、中国語の完了の標識 *le* の使用など）はコミュニケーションの必要上自然に発生したものか、あるいはかつてのロシア語と中国語のピジンの遺産として説明できるからだという。

今回の講演は、中ロ国境に見られる経済交流を、異なる民族の文化接触とその歴史、彼らが持つ異なるメンタリティや相互のステレオタイプなどを考慮に入れ、実際の「接触の場」を踏まえた言語の具体的な分析が行われていたことが印象的であった。この研究は言語学への貢献ではあるが、同時に社会学、歴史学、文化人類学などが融合した研究成果であり、まさに学際性的アプローチの有効性と地域研究における言語研究の意味を感じさせる研究と言える。

なお、Stern 教授および上記 Nekvapil 教授の講演会の内容は、Tomasz Kamusella & Motoki Nomachi 編による論文集“Borders of Identity and Language in Modern Central Europe: The Slavic World”（2012 年刊行予定）に収録されるとのことである。